
 <いま「協同」を問う'94全国集会報告>

第6分科会

「文化の協同」とはなにか

荒木 昭夫 (東京都/日本児童・青少年演劇団協議会事務局長)

「いま『協同』を問う94全国集会」第6分科会「文化の協同と協同組合」参加者の感想からこの日の議論の問題点を拾いたい。

議論したいとしていたものは、

- ①「協同」の文化の理念・内容。
- ②「協同」の事業・専門家組織としての文化協同組合の可能性。
- ③NPOと協同、協同組合との相互関係。

の3点であった。

「いま『協同』を問う94全国集会」の主題が、「人と地域に役立つ、新しい働き方と協同の仕事おこし」なのだから、その主題と合わすなら、文化の活動に深く係わる者たちの論ずべきことは、

- ①「文化の地域づくり」
 - ②「文化の仕事おこし」
 - ③「文化。その公共性の創造」
- となるか。

しかし「文化団体は、その違いを競い合うことでその生存が成立している」から「『文化の協同』などとはとんでもない、ということにはならないか」という問題を、座長の一人である田中義二氏はテーマ設定への疑問点として初めから提起していた。

ではやはりこの「文化の協同」とはどういう意味のことなのか、と問うところから始めねばならない。そもそも「文化の協同」なるものができるものか、できないものか。良いことだとはことばの上ではなっていない、果たしてその実現はなし得るものなのかどうか、と。

だからこの際失敗の経験も出し合いたいとして準備していた。失敗の原因が分かれば、次の成功もあり得るのであるから。

成功している、と思える例は、文化の世界でもそれは「ちいさな範囲」での「異業種間の協同」だった。そしてまだまだ端的なものではあった。

それが大協同となる日を夢見て、刺激的な討論の日を作りた、と考えてのこの当日であった。

つまりこの集会を、今までにもよくやってきた文化団体の「経験交流」に留めることとせず、「協同」が具体的に前進するところにまで進めたいもの、としていたものである。

《不思議な会議》

さきの田中氏は「文化団体には『協同』の意味がよく理解できない」との疑念を出す。例えば案内文などにある「協同の文化の理念と内容」という文言は「普通の文化」とどう違うのか。だから「文化団体の報告は、自己紹介とアピールと苦しい台所事情を話していたり、それを『協同』に結びつけようとして無理をしている」と。

あらかじめ準備していた報告を受けて、コメントターの安藤隆之氏は「これは不思議な会議だ」といった。「協同組合の人が座長席にいない」と。それは「協同組合の活動家の『文化の事業』についての自信のなさに因るものだろう」と言う。

だから、本日ここで収斂しなくてはならないのは、「文化」と「協同組合」とを結び付ける『方法』を捜し出すこととなる。それはつまり、文化の活動家と協同組合の活動家との結びつけあいということにもなるのであろうか。

安藤氏は続けて「文化活動の真の源泉は国の主人公である市民に因る文化発信であり、その活性化が『協同』行為の狙いである」ととりあえず定義して「プロによる芸術の発信とそのプロへの支援の体制をどう組むか」が現在での課題であり、生活者から文化を引き出す仕事と、その引き出し手としてのプロの文化人の生活をどう保証するかという「契約」の問題だ、と解説した。その成功例の一つとしては、児演協（日本児童・青少年演劇団協議会）と「おやこ劇場」との「契約」が

それだったと言う。また文化団体が自活出来る道はないのかと自問すれば、それはNPO、つまりアメリカにあった非営利法人の制度を挙げることができる、と助言した。

《文化と協同の距離》

議論の後の感想は次のようであった。

後藤武弥（劇団うりんこ）これで（創造に関わる活動で）メシを食っている人間が、メシを食って行こうということを訴えようと思ったが、会場の雰囲気は違っていた。結局、経験交流の場になった。「文化の協同」というテーブルには着席者の到達にズレがあり、かみ合う討論を迎えるまでにはまだ距離がありそうだ。さてどうすればその距離を埋められるのだろうか。「文化の経営と仕事起こし」というテーマでやればはっきりしたかも知れなかった。しかしその「文化の経営と仕事起こし」というテーマでも、やはり経験の蓄積も、科学者の追求もまだまだ弱いものだろう。

宮本偉（ぐるーぷ・いま）協同組合の「文化の協同」という具体的な実践はなく、ものたりない。「文化の協同」に必要な基盤作りとしての組織作りについて、次回はそれを話したい。

中康彦（名古屋おやこ劇場協）法制、税制問題を含めて、では具体的にどの団体と、どの個人と、どんなケースで「協同」することで、何をうみだせるのか。この組織とこの団体とが「協同」することでどんな仕事生まれ、食えるのか……など、具体的なサンプルが提示されてほしい。またはそのシュミレーションがなされてほしい。もっと多くの「協同」をとらえている団体、個人を巻き込むべきではないか。

落合謙一（めいきん生協）実践はしている。だがそれだけのコーディネイトをする人材とその力量がまだないので今日の困難を来しているということだ。

永坂絢子（橋本市）こうした討論のあることを何故社会教育の団体に知らせてくれないのか。そうしてくれれば、この論議に参加したいという

人達はいるし、参加させていくことで、社会教育施設での職員の質は上がる筈。人と人を結び、グループとグループを結ぶコーディネイトは「社全協」の会員たちはやろうとしている。

井関隆（中京大）情報が限られた人の間で回っているだけ。そこから出ていかない。だから、真の協同には至らないのではないか。

青柳早苗（神戸中高年事業団）「文化の協同」は可能だと思う。文化の根底に人間の生きざま、生活があるのだから。確かに文化を金銭に換算することに不慣れな日本人だが、送り手と受け手の民主的な関係を確立させて、本当の文化を創造していくために、それで食っている「プロ」という専門家が、「健康で文化的に生活をする権利のある人間」という立場で、劇団の人や、合唱団の人には頑張ってもらいたい。その熱意、心意気、また生きざまの表れが「金銭」として提示されても、それが共感をもち得るものであれば、受け手はモンクは言わないもの。一般の勤労者に対して、諦めず、理解を求めていく、自分自身の体を張った生きざま、思想の提案をし続けて、人間の生活に根ざした本当の文化をつくり出していく努力が大切だと思う。

小川修宏（センター事業団）文化を広げる運動から協同の理念を広げる運動へと移行していかなくてはいけない、という議論には深い共感を覚える。しかしまた、理念は立派でも大きな赤字を背負う事業となる場合の現実のリスクの大きかったことも「文化の協同」の裏側の問題として、今知った。

中西康視（阪神中高年事業団）文化というものは生活必需品ではなく、その人の価値感によるものだ。人と出会っても価値観が違えば協同ということにはならないのだから。

西浜利之（伊丹中高年事業団）個々の理念がぶつかりあって集団の理念となる。関係する者がもっと議論しなければならぬというその必要を感じた。それが「協同」との結びあいになる。活動家たちも、何故いま、それをするのかと深く深く語り合うことが必要だし、その話しを聞

きたかった。

吉村吾吾（子ども劇場・北信越）「文化の協同」の定義を含めて、もう一度理念の議論と、その実践を展開して来て、再会したい。

《仕事起こしの持つ課題》

前日の全体会で交わされていた議論をもって、今一度これらの感想を照射したい。

永戸祐三氏は「病院で死ぬということ」という映画作りの経過を踏まえて、事業体の特長をはっきりさせておくこと、と指摘していた。即ち、

- ①要求しているだけでは運動は進まないこと。
- ②その仕事の主体になること。
- ③その中で役割分担をしっかり把握すること。
- ④仕事に納得がなされていなければ力がでないということ。
- ⑤「良い仕事」といつてきたいだが、いまではさらにその「仕事の高さ」の意味も自覚していなければならないのだと。

それらが事業の能力を作るのだと。それは既に雇用の関係ではなく協同の関係であり、その最終目標は自治と人権の確立であり、それは一人ひとりの命が輝くときだという。それは今日では、人類生存条件の再生である、という。

富沢賢治氏はこのセッションをまとめて、「良い仕事」とは社会的に有用な仕事をなすことであり、それは社会的にどう評価を受けるかによって証されるのであり、その仕事の公共性がどれだけ高いかによっても試される、という。

そしてその「仕事」とは、その仕事をなす人自身にとっての自己表現であり、自己発達の役割を果たすのだ、と。

さらに「その仕事」とは結合労働であり、その仕事をなす人たちの組織のあり方が測られる、とも指摘した。

産業の空洞化が進む我が国の暮らしの中で、我々はいま、真に良い仕事を起こすことが求められている。それは住民の協同によって創られるべきであろう。住民のニーズに応える運動。それが我

々の言っている真の「よい仕事」の基軸である。……との議論であった。さて。

94年12月26日。「94年協同集会」の総括会議が開かれた。菅野正純氏によれば、この集会は「『非営利・協同』の大連合の時代を予感させた集会」だったという。「人間の生命のための労働」と「人と人との結びつきの再生」が議論の核心であったとおさえた。だが「教育」の「文化」の分科会では参加者の感想が対照的であったと述べる。

「教育」の分科会では、教育労働者、親、子ども三者を結ぶ組織のあり方が議論にあり、高齢者協同組合では、利用者とサービス供給者と家族との間の問題が共通している、というレベルにあるが、「文化」では、先述したように、違っていた。

要求の違いであろうか。取り組みの歴史の違いであろうか。いや、既に永戸、富沢氏が指摘しているように、その質の取り組みへ、文化の諸活動の水準が上がっていかねばならない時が来ているのではないか。それは我が文化に関わる活動家たちの気概と組織のあり方が測られているととらえるべきなのであろう。その視点から「課題を系統的に深める工夫」をなす事が次への展望を作ることとなる。我々は今までに、何をなし、何をなし得ていないか。

文化の地域づくりは文化の仕事を起こして来たか。文化の仕事起こしは、文化の公共性を創造して来たか。文化の公共性は、そのまま文化の地域づくりへとつながる筈だが、その社会的環境を創ってきたか。問われている課題であった。